

[031] 語文研究表紙奥付等

<https://hdl.handle.net/2324/10238>

出版情報：語文研究. 31/32, 1971-10-31. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

編集後記

中村幸彦先生送別記念特輯号。すでにご承知のとおり中村先生が本年三月末日に教室を去られて半歳を経た今、この標題を前にして、会員諸氏にもあらためて痛切な感慨がおりだろうと思う。いうまでもなく、それはわれわれにとつて残念とも惜しいとも何とも言いようのない文字である。

中村先生が本年七月を以て満六十歳の賀寿を迎えられることは、かねて知られわれ一同の心はずむ思いを誘っていた。お祝いには何がよろうかとあれこれ思い浮べた中に還暦記念特輯号編集のことがあり、その具体案を練りはじめたのが昨年春ごろであった。それがいちおうの成案を得るころに、まったく意外にも、突然先生のお口からその重大な御決意をうかがったのである。その時の研究室員一同の驚きと周章狼狽はいうまでもなかつた。

しかしその後種々の御事情を承るにつれて、先生御自身のためにも、また学界の爲にも、先生をこれ以上九州の地にお引きとめ出来る事態ではないことがだんだんと分ってきたのであった。そして、やがてその方向で事は決し、それに伴つて、編集企画の趣旨は今回のように変更する外なかつたのである。

こうした大きな動揺の中にも、しかし原稿をお願いしていた受講生の方には暑いさ中を予定通りにご執筆いただき、こうして十八篇にものぼる論文をお届け下さったほか、名譽教授福田良輔先生と白石悌三氏からは、御多忙の中をはるばると小品二篇を頂戴することができた。まことに有難い事と厚く御礼申し上げる。なおこの執筆者の中に、近世文学専攻の有力な顔触れが若干缺けていることにお気づきの方も多かろうと思うが、それは現在別組織によつて企画編集中の『中村幸彦先生還暦記念論文集』の執筆者との重複を避けたためであることを諒とされた。

本誌発刊以来これだけの点数の論文を一挙に掲載したのはもとよりはじめのものとはいえようか。御在職十五ヶ年間の御薫陶が、こうしてたとえ一歩にせよ二歩にせよ、学問の前進として明らかな形を見せていることで、先生にもほんのいささかでもお心を安めていただけることであるうか。

中村先生のお姿のない研究室はうつろひむなし。しかし、そうした感情こそ先生がもつとも嫌悪された懦弱と怠慢とにつながるものであることを思うと、今は何としても気力をふりしぼつて起ち上がり、歩きはじめなければならぬ。本号は、そういうわれわれ会員すべての覚悟のあかしである。

最後に、末長き先生の御健康を心からお祈り申し上げます。

(今井 記)